慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 橘樸「『官僚』の社会的意義」 |
| Sub Title | 橘樸著 『官僚』の社会的意義 |
| Author | 小泉, 信三 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1929 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.2 (1929. 2) ,p.323(147)- 325(149) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19290201-0147 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290201-0147 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註一　M. Leroy, La-vie de Comte de Saint-Simon, p. 249-250.

註二　Saint-Simon, op. cit. vol. I, intro. v.

註三　ibid, XLI-XLII.

註四　Saint-Simon, op. cit. vol. II, p. 238.

註五　Saint-Simon, op. cit. vol. I, intro LII.

# 橘樸「『官僚』の社會的意義」

小泉信三

日本若しくは西歐羅巴の社會を見慣れた目で支那の社會を觀察する者に恐らく第一に奇異に感ぜられることは、支那には封建貴族なる階級の存在せぬ一事であらう。尤も封建制度の遺物、又は封建的勢力等の語は、今日の支那社會に就いても屢々用ゐられて居り、殊に共產黨の文獻には此種の文字を見ることが多い。併し所謂「封建」は大概は軍閥を指す場合の形容詞たるものゝ如く見える。併し今日の支那軍閥は嚴格な意味での封建諸侯若しくは其後裔ではない。軍閥はたゞ兵權と共に政權を掌握する軍人群である。其首領はよし綠林出身ならぬ迄も、概ね下級將校から立身し、其才幹と機會と緣故とに由て其勢力の大を致したものであつて、英國、蘇國の世襲貴族又は東部普魯西に於けるユンケルの如きものは、支那で見ることが出來ぬやうである。然らば支那社會には名門名族といふものはないかといふと、それはある。而してそれは官吏若しくは嘗て官吏たりしものゝ形づくる集群である（らしい）。然らば官吏となる者は誰であるかといへば、それが國家試驗の合格者であるのは不思議でないが、其試驗科目が法律學經濟學でなくて、進士たり擧人たるものは其の古典文學の素養を試みられるといふのは、西洋人には異樣の感に堪へぬ所であらう。此の詩文の技倆に依て官吏の資格が取得されるといふ事實と、「好鐵不打釘。好人不打兵」なる諺にも見らるゝ如く兵士が人に賤しめられるといふ事實とは、支那社會の特色を見る上に於ての一の重要なる鍵となるものの如く考へられる。而して此等の諸點を考察すると必ず逢着しなければならぬのは、支那に於ける

官僚の社會的意義果して如何の疑問である。本書は是に答へんとするものである。

他人の著作を紹介批評しつゝ其間に自己の智識と所見とを發表して行くのは、著者橘氏慣用の筆法であるが、「官僚」の社會的意義、及び支那の村落及家族組織の兩部に分たるゝ本書でも、氏は「官場現形記」といふ、支那の官僚社會に行はるゝ、罪惡を指摘し、又その漸次に凋落して行く徑路を描いた有名な小說の紹介に托して其所見を述べてゐる。此小說は多分光緒二十九年（一九〇三年）に初版を出し、翌年再版を出したもので、作者は官吏登用試驗に落第した不平家であらうと記されてゐる。氏は此小說の序文中の官僚批評の語句を引用しつゝ官僚社會の成立、官僚生活の內幕、官僚の階級性を論じ、次いで小說本文の主人公たる陝西省某縣某部落の農家の一青年が登用試驗に合格して擧人となることに關聯して、支那農村の組織、村の敎育、擧人の階級的意義、官僚學問の眞相及び農村の家族組織を論じて居る。

橘氏に由れば、官僚は即ち支那社會の支配階級であつて、之に對する被支配階級は農工商である。而して官僚が支配階級たることは所謂三十四朝を通じて渝らざる事實であつて、往年の第一革命ですら淸朝は顚覆しながら、官僚階級は依然之を存續せしめて居るのである。然らば官僚は將來に於ても猶ほ支那社會の支配階級たることを失はぬであらうかといふに、橘氏は今日此點に就いて重大なる變革の起らんとしつゝあることを認めて居る。「……一皮剝いで觀察の眼を紙背に徹せしめると其處には過去の二千年と全く異つた潮流が案外に激しい勢で渦卷き返して居る光景を認識するであらう。此の潮流を構成する所の要素は發生の順序に從つて數へると第一に學生、第二に商人、第三に勞働者である。勞働者は支那語の所謂「工」であり、學生は其出身如何に論なく一種の讀書人であるから之を「士」といふことが出來る。即ち所謂四民の中、士工商の三つの職業者が團體的に「官」に對して戰を挑み、此の意味に於て階級鬪爭の序幕が開かれた譯である」（小泉問。近年の熾烈なる農民運動は當然此に數ふべきものにあらざるか）。さうして此よりして新なる組織の社會が產れ出るのであるが、その產れ出る社會はブルジョワジィ支配の社會であらうといふ（二九―三〇頁）。

私は支那學者の著作に一向不通の者であるが、僅に知る限りに就いていへば、本書の著者は、蓋し支那語支那事情を知ること深きと共に、西洋社會學及び社會思想に通ずること最も精しき一人であらう。評者は昨秋支那を一巡して同國に於ける社會運動の實狀視察を試みたが、其際評者の取つて第一の指針としたものは、本書の著者が「滿蒙」「東亞」其他に發表した論文十餘篇であつた。今本書の如き僅に百頁にも足らぬ小冊子であつて、固より到底著者の學殖を示すに足らざるものである、が其をも猶ほ茲に報導するのは、著者が其の支那經濟史、支那社會思想等に關する研究を今後引續いて發表せんことを希望すること甚だ切なるものあるが爲めである。（大連市支那研究會發行　定價壹圓）